吉益四峰（今井鉄太郎）の家系について

森　納

京都吉益家を継いだ今井鉄太郎（吉益四峰）の実家は鳥取県倉吉市津原にある。

今井家の先祖は宇佐美吉左衛門といい、津山、森家の家臣であったが、元禄十年森家の廃絶後浪人となり、今井忠左衛門と名のって正徳年間伯耆八橋郡下伊勢村（東伯町）に住居し医術を学んで忠意と名を改めて医を業とした。その後、玄伯兼勝、玄伯兼政と医を継いだが、兼政の代に鳥取藩家老職、津田筑後（元貞、七千石、天保十一年没）の侍医となって、その領地八橋村（東伯町）に住居を移した。しかしその後火災にあったため津田家の了解を得て、もとの津原村に戻って医業についた。その子玄城（玄丈）は京都に出て医術を学んだ。弘化三年には水原三折について産科を学び採頷術を伝授されて帰っている。帰郷後御典医という名と産科の名医として評判高く、また寺子屋を開いていたという。

玄丈二男の鉄太郎は天保四年、津原村に生まれ、若くして京都に出て吉益家に入った。吉益家は当時北洲の養子復軒の代で、復軒について古医方を学んだ。更に安政五年には同じ京都の広瀬元恭の門に入って蘭学の修行もしている。更に万延元年八月には大阪に出て華岡塾合水堂で学んでいる。そして吉益門下で、秀才篤学で一門の尊敬と師復軒の親愛を受け、養子入籍を乞われ、その娘さだの婿となった。吉益周助筆の今井玄城にあてた吉益家親類書が残されていたが、焼失したという。嘉永二年、鉄之助十六歳の年であったと思われる。

今井家にはこの鉄太郎の養子縁組が原因と思われる、医業継続のために他家より医師を入籍させている。これが今井玄庵で久米郡上井村（倉吉市）の医家岸田家より入ったものである。

吉益家に入った鉄太郎は吉益四峰と称して古医方の研鑽にあたったが、文久二年故あって妻さだを伴って帰郷している。その原因は明らかでないが、父復軒との意見の相違

とも、郷里の父の死去によるとも伝えられている。郷里での四峰は京都の御典医ということで伯耆一円から患者が集ったということで、また儒学、仏教、キリスト教等の研究もしていたと伝えられている。明治以降再び京都に戻ったということであるが、その時期等については明らかでない。

四峰の長男、雄太郎は京都府立医学校を出て外科を専攻し、母校の助教授をしたのちドイツ留学をし、帰国後、大垣市で病院を設立し経営した。

四峰の次男良蔵も京都府立医学校を卒業し、帰国し郷里の津原で開業した。

他方、今井玄庵は慶応二年に病没し、その子頑治が医師となって、父と同じく浪人医師という藩の士族医師の資格を与えられて開業していたが、四峰の帰国によって、釛（コガネ）村（東伯町）に移った。

（鳥取県・森医院）

「八十五年京都産婦人科医界のあゆみ」

三木通三
森武史
伴一郎

明治初期は医学の黎明期であり、日本では和漢医と蘭学医が錯綜していた。この時、新明治政府は行政改革と共に、医学分野においても洋医学を勧めるよう示唆した。かつ多くの和漢医の洋医への転換をはかった。しかし当時の洋医学は専ら翻訳医学に頼ったものであり、このことは多くの殊に外科・産婦人科部門の臨床医達を困らせた。欧米医学書を独学自習で翻訳しながら、臨床手術を実施する彼等には、臨床で体験する多くの疑問点を一人で解決して行くのは至難のわざである。結果、複数の同系専門医の集まり、つまり相互の知識体験交換の場、今日でいう専門医学会の発足を喝望するに至った。明治二十年（一八八七）から明治三十年（一八九七）が、その期に該当する。またこの時